第5回　日本医師会

赤ひげ大賞

第5回 赤ひげ大賞（5人）

下田輝一	秋田	山内診療所院長
大森英俊	茨城	大森医院院長
明石恒浩	神奈川	ザ・ブラフ・メディカル＆デンタル・クリニック院長
大森浩二	京都	大森医院院長
瀬戸上健二郎	鹿児島	薩摩川内市下甑手打診療所前所長

本賞の名称は、山本周五郎氏の時代小説「赤ひげ診療譚」に由来しており、この「赤ひげ先生」の実在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所で活躍した小川笙船と言われていますが、病に苦しむ人がいれば何としても助けたいという思いは今も変わりありません。

現在、わが国では、世界が経験したことのないスピードで超高齢社会を迎えています。日本医師会では、その状況に対応していくための鍵は各地域で医療に従事する「かかりつけ医」にあると考えて

日本医師会　横倉義武会長

高まる「かかりつけ医」の重要性

おり、皆さんに「かかりつけ医」を持つことを呼び掛けています。

今回、受賞された先生方は、献身的に医療活動に従事され、患者さんから「かかりつけ医」としての信頼も厚く、まさに現代の赤ひげ先生と呼ぶにふさわしい方々ばかりです。一人でも多くの皆さんが、この紙面に触れることで、このような「かかりつけ医」を持ちたいとの思いを強くしていただければ幸いです。

ＢＳフジで来月５日放送

ＢＳフジ「かかりつけ医たちの奮闘　第５回赤ひげ大賞」
2017年３月５日（日）14:00〜14:55放送

住民の心と体を支える

下田輝一氏　（秋田県横手市）

長年の信頼

しもだ・てるかず　山内診療所院長。昭和18年、現在の秋田県横手市生まれ。73歳。岩手医科大大学院修了。呼吸器内科を専門に同大助手、講師、第1内科科長を歴任し昭和54年に横手市立横手病院第1内科科長に転じる。平成2年から現職。三又へき地診療所など過疎化が進む3つの地域で、唯一の医師として地域医療に従事し、通えない患者のために訪問医療も行っている。

じっくり話し合い迎える「理想の最期」

秋田県屈指の豪雪地帯である横手市、奥羽山脈の麓にある旧山内村の三又地区は人口が200人あまり、65歳以上の高齢者が占める比率は40％以上という小さな集落だ。毎週火曜の午後に、地区唯一の医療施設「三又へき地診療所」を訪ねる。「何とだったー（その後どうですか）」「大丈夫そうだね。今日はインフルエンザの注射をしようか」

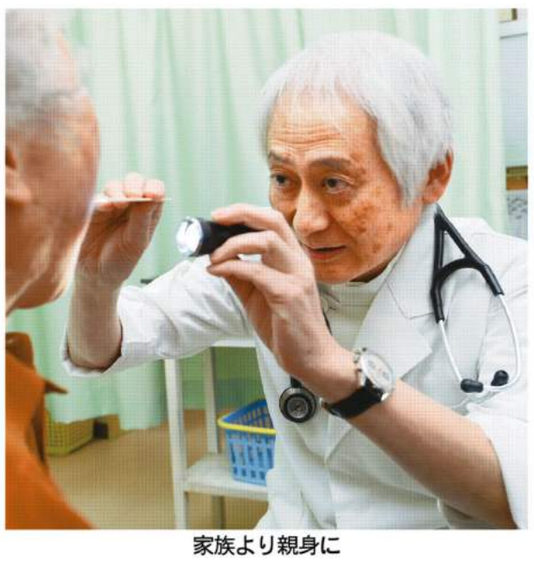
県南部の旧大雄村（現在の横手市）で昭和18年、開業医の輝千代氏の長男として生まれ、地域医療に尽くす父の姿を見て育った。岩手医科大に入り、呼吸器アレルギーを研究して大学院まで進んだ後、同大の助手、講師を歴任した。横手市立横手病院に転じた後も地域医療への思い断ち難く、旧山内村で「山内診療所」を引き継いだのは平成2年のことだ。

赴任予定だった医師が病に倒れてのピンチヒッター。横手高校に通っていた当時、山内村の村長の息子が同級生で「医者がいなくておやじが困って全国を探して歩いている」と聞いた話を思い出したからだ。「三又へき地診療所」と父が守ってきた旧大雄村の診療所と、3カ所を引き受けることになった。人口減少率、高齢化率ともに全国一の秋田県の中でも過疎化が進む地域で、診療所に通えない80〜90代の高齢者も多い。週2回のペースで往診に出向く。

難しいのは人生最期の「看取り」。「胃ろうなどで無理に延命するのはどうか」。家族の負担を考えつつ「もしもの時」に備え、早い段階から本人と家族とじっくり話し、多くが「自然の成り行きに任せましょう」という言葉に納得する。長年の信頼関係がなければ成り立たない、理想の最期の迎え方がそこにある。

（藤沢志穂子）

大森英俊氏　（茨城県常陸太田市）



家族より親身に

おおもり・ひでとし　茨城県常陸太田市徳田町の大森医院院長。昭和29年、同県生まれ。62歳。岩手医科大医学部卒。同大第1外科助手を経て、平成5年に父の後を継ぎ大森医院での勤務を開始。翌年、理事長に就任。高齢化の進む医療過疎地で、在宅医療や介護サービスの充実に尽力。医学生や若い医師を受け入れ、地域医療実習を行うなど家庭医の育成にも力を入れている。

過疎地の医療や福祉体制向上に尽力

「祖父や父の姿を見て育ったので、自分もいつかは帰ってくると思っていた」

平成5年に、14年間勤めた岩手医科大付属病院を辞め、39歳で故郷の茨城県常陸太田市へ帰ってきた。大森医院のある地域には診療所が2カ所しかない。高齢化率は40％を超えており、寝たきりや足腰が弱ったために通院が難しい患者も多い。そこで、医師や看護師が定期的に患者の自宅などを訪れる訪問診療や巡回診療の体制を充実させてきた。

17年には社会福祉法人を立ち上げ、医療と介護の連携事業を本格的にスタートさせる。同年、特別養護老人ホームを設立し、その後も通所で介護サービスを受けられる小規模多機能施設などを立ち上げた。「医療過疎地では患者は医師を選べない。だから医師は患者のニーズに敏感でなくてはならない」と大森医師は語る。その使命感を原動力に、「初期医療から最期を迎えるまで地元で過ごしたい」という多くの地域住民の願いを形にしてきた。

同地域に50年以上住んでいる浅野よしさん(96)は足が不自由で認知症も進行しており、訪問診療と介護を受けている。「亡くなった夫が苦労して建てた家を手放すわけにはいかない」という思いから、東京で働く子供らと離れて1人で暮らしている。不安はないかと問うと「こんなに頼れる先生がいるから大丈夫。地域の人にお世話になれて、私は幸せ者」と笑った。

地域医療において、医師は家族よりも親身に患者の生き方に寄り添うことがあるという。

「深い付き合いの中で、患者さんに必要なことが見えてくる。こんなやりがいはほかにない」。大森医師は充実感に満ちた表情でそう語った。

（丸山将）

明石恒浩氏　（横浜市中区）

すべての人に

あかし・つねひろ　横浜市中区のザ・ブラフ・メディカル＆デンタル・クリニック院長。昭和28年、東京都生まれ。63歳。比イースト大医学部卒。茅ケ崎徳洲会病院内科勤務を経て、62年にザ・ブラフ・メディカルクリニック（現・ザ・ブラフ・メディカル＆デンタル・クリニック）院長に就任。英語やタガログ語など多言語での会話力による安心感から、外国人を中心に幅広く患者を受け付け、地元で絶大な信頼を得ている。

「来た人は拒まず診療する」がポリシー

横浜・山手の高級住宅街の一角にあるクリニックの待合室。一瞬、日本にいることを忘れるほど、欧米人、アジア人問わず外国人が次々と訪れ、院内は英語やタガログ語が飛び交う。

フィリピン大、比イースト大医学部に学び、帰国後は茅ケ崎徳洲会病院に勤務。当時最先端の「腫瘍内科」のプロフェッショナルとして活躍するなど輝かしい経歴に区切りをつけて開業したのは、今から30年前のことだ。クリニックがある土地は、かつて自分が学んだセント・ジョセフ・インターナショナルスクール（平成12年廃校）があったまさに隣接地。「見えない運命の糸に導かれているのかもしれない」とかみしめる。

開院以来、「フィリピンからの密航者がずぶぬれでたずねてきたり、アルコール中毒患者が訪れたこともある」というが、「来た人は拒まずに診療する」のがポリシーだ。時に手持ちの金が少ない人もいるが、「払える金額を500円でも払ってもらえれば」とし「必要な人に必要な医療を与えたい」と話す。受け付け業務を行うベダー美歌さん(51)も「初めて来た人でも外国の方でも、皆さんに同じ態度をとられる」と語る。

モニターばかり見て、患者の方を見ないで診察を終える医師が多くなったといわれて久しいが、それとは反対に、相手の表情、目をしっかりと見据え、積極的な触診、相手の疑問に丁寧に答える。「コミュニケーションをしっかりとることがポリシー」とする明石院長の診察を受けた患者の顔は安堵に満ちていた。

当面はクリニックを守るが、「元気なうちに、恩返しも含めて、フィリピンや他の発展途上国で医療に関わることも考えたい」と意気込む。

（那須慎一）

日本医師会　赤ひげ大賞　日本医師会と産経新聞社が共催、ジャパンワクチン株式会社が特別協賛し、地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績を顕彰。広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設。全国の都道府県医師会から推薦された「地域のかかりつけ医として住民の疾病予防や健康の保持・増進に努めている医師」から、毎年1回、5人を選考委員会で選定し表彰する。

【主催】日本医師会、産経新聞社　【後援】厚生労働省、フジテレビ、ＢＳフジ　【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。

ジャパンワクチン株式会社
japanvaccine.co.jp

第5回　日本医師会

赤ひげ大賞

地域医療の現場で奮闘

地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第５回「日本医師会　赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・ジャパンワクチン）の表彰式が10日、東京都内で開かれる。大賞には全国各地で活躍する医師５人が選ばれている。選考会の様子とともに、受賞者の日々の活動を紹介する。

選考会　長年の献身を評価

厳正な審査が行われた選考会＝東京都文京区の日本医師会館（伴龍二撮影）

「赤ひげ大賞」の受賞者選考会は昨年10月、東京都文京区の日本医師会館で開かれ、各都道府県医師会の推薦を受けた23人を５人に絞り込む審査が行われた。

各選考委員は、事前に候補者を点数（10点満点）で評価し、点数とは別に最終選考に残したい候補者を５人まで選択。選考会では都合がつかず欠席した山田邦子委員を除く各委員が、最終選考に残したいと考えた理由などを中心に意見を交わした。各都道府県医師会から推薦された〝赤ひげ先生〟だけあって、各候補の点差はわずか。選考会では「９点、８点と差はつけたが、どの先生を選んでも受賞者として間違いない」との今村定臣日本医師会常任理事の言葉に全員が賛同した。

今回から「原則として70歳未満」の条件がなくなり、地域での長年の献身がより着目される結果に。過去４回の受賞者20人は18都道県にまたがるが、まだ受賞者が出ていない府県もある。羽毛田信吾・昭和館館長からは「後に続く人に励みになるという意味では、地域を考慮することも大事だ」との意見も出された。

今回から選考に加わり、司会も務めた日本医師会の道永麻里常任理事は「どの先生も素晴らしく、全員に（賞を）受けてもらいたい。評価は本当に難しい」と感心した様子。「推薦文の善しあしに左右されがちなので、次回からは記入欄を工夫したい」と議論を締めくくった。

■選考委員

羽毛田信吾	昭和館館長、宮内庁参与
向井千秋	宇宙航空研究開発機構技術参与、東京理科大学特任副学長
山田邦子	タレント
小林光恵	作家
神田裕二	厚生労働省医政局長
今村定臣	日本医師会常任理事
道永麻里	同常任理事
飯塚浩彦	産経新聞社専務取締役
河合雅司	同論説委員

■オブザーバー

寺野伸一	ジャパンワクチン社長

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則１人以上２人以内）を各都道府県医師会長が推薦

【推薦基準】病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員および都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）

家族の健康を預かる「頼れる慈父」

大森浩二氏（京都市南区）

頼れる慈父に

「食べる方は大丈夫？」。往診先の女性（90）の前にしゃがみこんで、ゆったりとした口調で話しかける。

少し腫れた足や手、指、爪と一つ一つ丁寧に触診すると、次第に女性の表情が穏やかになっていった。往診中、一貫しているのは、患者と目線をあわせて行う〝対話〟だ。患者である女性が思わずいすを指さして「座ってくださいよ」と言葉をかけるほど、腰が低い。

「大森医院」があるのは京都市の都市部。医療機関は充実しているが、「老老介護」や「認認介護」だけでなく、独居のため近くの医療機関にも満足に通えない患者も少なくないという課題がある。「都会だからスペシャリストもたくさんいる。だけど、そこにたどり着けない人もいる」。医療の隙間を埋めるべく地道に診察を続けている。

近年、往診の需要は増し、多いときで１日５人ほどの自宅を訪ねる。二十数人いる往診患者の約半数が独居高齢者だ。

約20年前に外科医だった父の医院を継ぐまで、大学病院の消化器外科医として第一線で先端技術を磨いてきた。いま医師としての歩み方は大きく転換したが、「主治医の熱意が患者を救う」という信条は変わらない。

在宅医療を充実させようと自身が窓口となり、薬剤師や歯科医、管理栄養士ら多職種と連携することで細やかに患者の状態を把握する仕組みもいち早く取り入れ、患者や家族の生活の質を向上させた。

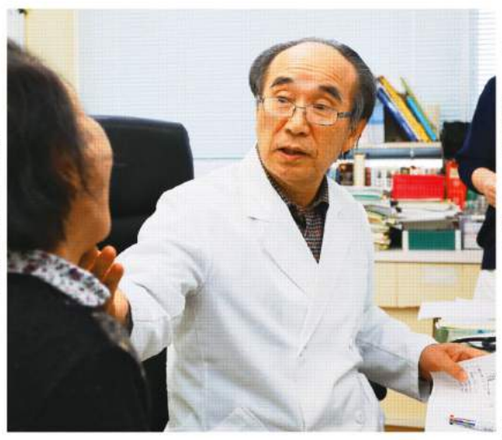
「最期まで先生にみてほしい」。患者や家族からの信頼は厚く、在宅での看取りを依頼されることも増えた。

「家族みんなの健康を預かっていく、頼れる慈父のようでありたい」。そう言って、やわらかく笑った。（山崎成葉）

おおもり・こうじ　京都市南区の大森医院院長。昭和31年、京都市生まれ。60歳。京都府立医科大医学部卒。同大学付属病院第２外科助手や府立与謝の海病院（現・府立医大付属北部医療センター）外科副医長などを経て、平成８年に大森医院を継承。多職種と連携した在宅医療に取り組み、患者や家族に寄り添う在宅での看取りも実践する。

島民の「最後の砦」　離島医療に注力

瀬戸上健二郎氏（鹿児島県薩摩川内市）



島の「最後の砦」

離島・僻地医療に従事して38年。人口約2300人が暮らす東シナ海の離島、下甑島（鹿児島県薩摩川内市）の最南端にある「下甑手打診療所」で昨年９月末まで所長を務め、今も精力的に診療活動に奔走する。人気漫画・ドラマ「Dr.コトー診療所」の実在のモデルである。

「（病巣などを）自分で見つけ、自分で麻酔し、手術を行ってきた。それを支えてくれたのは地域住民との信頼であり、理解があったからこそできた」

鹿児島県の大隅半島・東串良町の農家に生まれた。医師を志したのは高校３年生時に世話になった医師の「医者の仕事もおもしろいぞ」の言葉だった。

進学した鹿児島大では胸部外科の研究と臨床に没頭。国立療養所「南九州病院」（姶良市）勤務を経て昭和53年、下甑村から「半年だけでも来てほしい」と請われ島へ赴任した。不十分だった設備やスタッフの拡充に努め、昼夜問わず離島医療の最前線で奮闘、「当初半年だけのつもりだったが、気がつけば38年過ぎていた」と振り返る。

理由を聞かれると、「何でもありの地域医療のやりがいとおもしろさを知ったから」と答えるが、「悔しい、情けない思いもいっぱいしてきた」という。それでも続けられたのは、島とそこに暮らす人々の魅力。島民にとっての「最後の砦（とりで）」を守り、千人以上島で看取った。

甑島を離島医療の先進地とすべく昭和59年から「甑島地域医学研究会」を開催。全国から医師の研修も受け入れる。昨年10月に後任所長が着任、今は相談役的に診療所で働く。薩摩川内市市民福祉部次長にも就任、下甑島を含む甑島列島の診療体制に関し助言する立場だ。「Dr.コトー」から「赤ひげ」へ。離島医療に〝最終回〟はない。（谷田智恒）

せとうえ・けんじろう　鹿児島県薩摩川内市下甑手打診療所前所長。昭和16年、同県東串良町生まれ。75歳。鹿児島大医学部卒。鹿児島大第１外科、国立療養所「南九州病院」勤務を経て、昭和53年から平成28年９月末まで同診療所長。離島・僻地医療の充実と向上に精力的に取り組む。離島医療をテーマにした漫画・ドラマ作品「Dr.コトー診療所」のモデルになった。

羽毛田信吾委員　この賞も５回を重ね、改めて全国の先生方の努力によって地域医療が守られていることを実感している。今回は厳しい環境の中で住民に寄り添っている医師の努力を特に評価した。これからも後に続く人たちの励みになるよう、高い志を持って、日々の医療に取り組んでいただくことを期待する。

向井千秋委員　「年月」というのを大きなキーワードに、長年にわたり地域で他分野との連携などのシステム作りを進めている人を評価した。システムをきちんと作れるのが現代の赤ひげだと思う。別の分野の人や次の世代にも熱意を橋渡ししていくことが重要で、医学生にも赤ひげ先生の存在を伝えてほしい。

小林光恵委員　時代が大きく変わる中で、医療現場も多職種が密に連携していく形になってきている。今回は多職種連携に特に熱心な印象のある医師を推したが、取り組みをしていても推薦文に書かれていない医師をどう評価するかは課題だ。若手の医師が「頑張れば自分にもできるかも」と思えることも大事だと考えた。

神田裕二委員　医療過疎地や社会で取り残されている人へ医療を提供している医師を評価した。有床診療所が減る中、地域のニーズに応えて増やすなどユニークな取り組みもあった。地域で苦労しながらも、次世代の育成に積極的な姿勢は、現場で苦労している人だけでなく次世代の医療人にも励みになるだろう。

山田邦子委員　地域に根付き、身近に、そして、たとえ過疎地でも長きにわたり孤軍奮闘されている先生方が全国にいらっしゃることを知り、感激と感謝の気持ちでいっぱいです。回を重ねるごとに敬意と尊敬、そして緊張感を持って選考させていただいています。

（書面コメント）

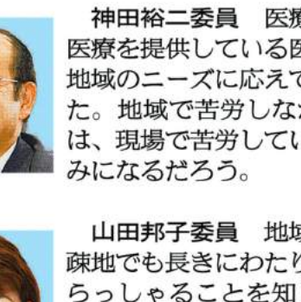
寺野伸一ジャパンワクチン社長　赤ひげ大賞は今回で第５回という節目を迎えました。ジャパンワクチンは、地域医療を長年支えてこられたかかりつけ医の先生方の活躍を顕彰する趣旨に賛同し、第１回から協賛をさせていただいております。今回も各地の事情に沿いながら、献身的に住民の皆さんを支えてこられた５名の先生方が受賞され、かかりつけ医の皆さまの存在がいかに住民の生活にとって大切であるかを改めて実感いたしました。ジャパンワクチンは、地域で支えあう医療体制の構築のためにも、日本の未来を支える子供たちのためにも、これまでに受賞された25名の先生方をはじめ、全国で地域医療を支えてくださっているかかりつけ医の先生方のますますのご活躍を願っております。受賞者の皆さまに心よりお祝い申し上げます。

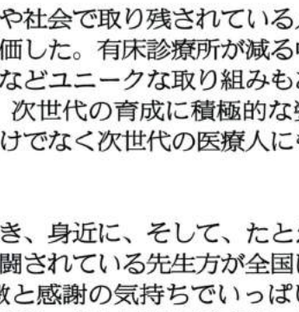
ラブベビ.jp
LovesBaby.jp

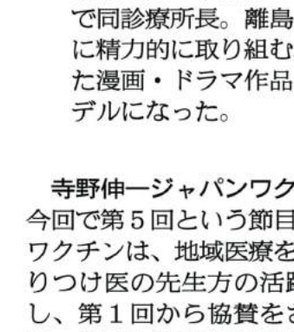
愛する赤ちゃんを守るための感染症&ワクチン情報サイト

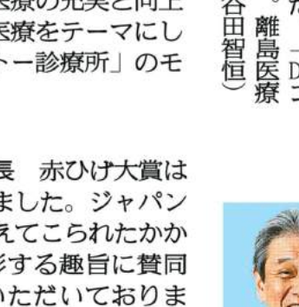
“いつでも どこでも” ママに役立つ
感染症とワクチンに関する情報サイト
それが「ラブベビ」

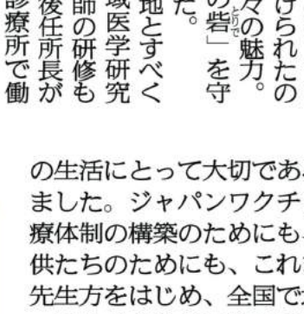
ワクチンデビューは生後2か月で!!











ワクチンの詳しい解説やスケジュール管理に便利なツールが満載です。
パソコン　スマホ　ラブベビ　検索

スケジュール管理アプリ
「ラブベビ手帳」
赤ちゃんの生年月日を入力するだけで、0歳から1歳児の接種スケジュールが簡単に作成できます。

「ラブベビ手帳」はこちらからダウンロードできます。
iPhone版　Android版

ジャパンワクチン株式会社は、日本医師会「赤ひげ大賞」へ特別協賛しています。

力をあわせて、未来を守る
ジャパンワクチン株式会社